



森鷗外「独身」論 —諸問題について—

**WAE MOHAMED ORABI ABDELMAKSOUD**

*Lecturer, Dept. of Japanese Language, Faculty of Arts,  
Cairo University*

*Assistant Professor, Dept.  
of Modern Languages and Translation,  
College of Languages and Translation –  
King Saud University*

## はじめに

「独身」は明治42年11月に書かれ、翌年1月の『スバル』に発表された。明治42年8月に同雑誌に発表された、軍人の石田小介の小倉の着任直後の私生活を描いた、「鶏」に続いて、小倉を作品舞台にした二つ目の作品である。「独身」は短編小説にもかかわらず、1～6までの短い章、あるいは6つの節からなるものである。各節の梗概を以下に示す。

1. 伝便についての講釈、小倉の雪の夜。
2. 大野の家で落ち合った客戸川・富田は主人と有妻無妻の議論。
3. 戸川が語る雪の夜で寂しさから下女を妻とした宮沢の話。
4. 寧国寺さんという曹洞宗の僧の登場、大野の三宝帰依についての講釈。
5. 富田が語る下女を妻とした箕村の話。
6. 大野の官能、お嫁さんについてのお祖母さんからの手紙。

この作品を読むと、「独身」の物語が主に第二節から第六節まで見られることが分かる。作品の第一節には、作中人物が一切登場しない。ただ、名乗られていない語り手の語りだけで創作されているのである。先行研究では「独身」の冒頭について触れていないことが注目される。だが、論者はこのような冒頭の重要性について考える必要があると思う。つまり、第二節の最初に見られる「小倉の雪の夜の事であった」という第一節との繋がりとして設定されている文章までを省いて読めば、残りの第二節から最後の第六節までを、まとまった一つの作品として読んでいくことができるのではないかと考える。とすれば、第一節は構造上にどういう働きがあるのであろうかという疑問を抱かざるを得ない。言い換えれば、第一節が残りの五つの節とそれほど密接な関係がないなら、なぜ鷗外がこの第一節を創作したのだろうか。そういった疑問に回答することは本論の目的の一つである。そこで語り手について考察することを手掛かりとして、第一節を位置づけることを試みたい。だが、語り手に関する考察を進めて行く前に断っておきたいのは、「独身」という作品を語っている名乗っていない語り手以外

に、宮沢の物語を語る戸川や箕村の物語を語る富田と最後にお嫁の岡田について手紙で語るお祖母さんなどの語り手が見られるが、本論にもこれらの語り手の特徴や語り方などについて考察したり、「独身」全体の語り手と対比したりする。さらに、後半で本作品によく見られる〈微笑〉や〈笑い〉といったキーワードを軸に論をさらに展開する。論者はそういった問題意識などをもって森鷗外「独身」について様々な角度から考察を進めていきたい。

## 一、「独身」の語り手について

### ① 自分の個性が分かる語り方

さて、注目に値するのは、「独身」の語り手が〈外界〉をよく意識していることである。例えば、次の箇所を見てみよう。

西北の海から長門の一角を掠めて、寒い風が吹いて来て、蜜柑の木の枯葉を庭の砂の上に吹き落して、からからと音をさせて、庭のあちこちへ吹き遣って、暫くおもちゃにしていた、とうとう縁の下に吹き込んでしまう。そういう日が暮れると、どこの家でも宵のうちから戸を締めてしまう。（壺、下線などは論者による。以下も同じ）

この出だしで下線を付けた「西北の海」、「風が吹いてき」たこと、「庭のあちこち」、「縁の下」、「どこの家でも」などのすべては、「外」と関わるものである。これらのところは、語り手が如何に「外」のことを意識しているかをはっきりと示している。また、「外はいつか雪になる」や、「この氷が二日より長く続いて張ることは先ず少い。遅くも三日目には風が変る。雪も氷も融けてしまうのである」、さらに「風の音がひゅうと云う」などという部分も、「外」の天気、とりわけ「風」をよく注目する語り手の姿を明白に反映しているのではないか。続いて、「外」の「声」に注目したい。次の二箇所を挙げよう。

それから優しい女の声で「かりかあかりか、どっこいさのさ」

と、節を付けて呼んで通るのが聞える。(壺)

主人の飼っている Jean (ジャン) という 太犬が吠えそうにして廃して、鼻をくんくんと鳴らす。竹が障子を開けて何か言う声がする。(四)

この二箇所ともは語り手の「外」の人間の「声」への意識を明示している。さらに、後者は、はっきりと聞き取れない下女の「声」や犬の吠えそうにして止めた「鳴き声」も聞き逃していない語り手の姿を反映しているのである。また、次の部分も見てみよう。

伝便や花欄糖売は、いつの時侯にも来るのであるが、夏は辻占売なんぞの方が耳に附いて、伝便の鈴の音、花欄糖売の女の声は気に留まらないのである。(壺)

この部分は、「戸外」で物を売っている人の「声」を夏にも冬にも注目している語り手の姿を示している部分である。続いて「外」の「音」を強く意識している語り手の姿がはっきりと窺える次の箇所も挙げよう。

- ・おりおり足を刻んで駈けて通る伝便の鈴の音がする。(弐)
- ・小倉の雪の夜に、戸の外の静かな時、ちりん、ちりん、ちりん、ちりと急調に聞えるのである。(壺)
- ・この時戸口で、足踏をして足駄の齒に附いた雪を落すような音がする。(四)

これらの箇所は語り手のいる部屋の「外」あるいは、建物の「外」の割と近い所を指しているが、例えば「この辺は旭町の遊廓が近いので、三味や太鼓の音もするが、よほど鈍く微かになって聞えるから、うるさくはない」という部分から分るように、近くにある「旭町の遊廓」の「三味や太鼓の音」は、さらに遠い所から聞こえることが注目される。つまり、語り手が家の「外」の範囲の「音」だけを意識して

いるのではなくて、それより遠い所から聞える「音」にも耳を傾けていることが言える。また、ここでは、二重線の「急調に」や「よほど鈍く微かに」という副詞に注目したい。この部分からは、語り手がただ空耳で「外」から聞こえてくる「音」を意識しているのではなくて、その「音」の調子を区別しながら、意識していることが分かる。さらに、次の部分を挙げよう。

二人の客の帰った迹は急にひっそりした。旭町の太鼓はいつか止んでいて、今まで聞えなかった海の鳴る音がする。（六）

この部分でも同じことが注目できる。つまり、お客遅く帰ったひっそりとした雰囲気になった時、語り手の意識が〈外界〉の方へ向かうのであるが、「旭町の太鼓はいつか止んで」いたが、語り手の意識はさらに遠い所に向かって、「今まで聞えなかった海の鳴る音が」聞こえる姿が見られるのである。

一纏めすると、語り手の「外」の「風」、「声」、「音」、「鳴き声」などをよく注目することを通して、いかに〈外界〉を意識しているかが明白に窺える。また、語り手がそれほど「外」の物の「音」、人の「声」などを注意して聞くことは、静かな空間である「内」の様子を反映することになるだろう。そして、その静かな「内」が「独身」の静かな生活を暗示するのではないか。

さらに、聞き手への〈意識〉に触れたい。家を外で駆けて通る伝便のことを紹介しようとする語り手が次のように述べる。

伝便と云っても余所のものには分かるまい。これは東京に輸入せられないうちに、小倉へ西洋から輸入せられている二つの風俗の一つである。（七）

このような言い方で語りの口火を切るが、ここで見られる「余所のもの」は、自分の語りを聞く聞き手のことを〈意識〉して語っている語り手の姿を明瞭に反映しているのではないか。

以上の考察から、語り手の〈外界〉への意識がよく窺える。また、聞き手を「余所のもの」として意識して語りのきっかけを作ろうとする姿は、如何に独身の静かな日常生活を越えようとしているかが明白に示している。また、聞き手に紹介しようとしている「伝便」と直接な関係のない東京にまだない広告柱やハインリヒ・フォン・ステファンの郵便網やパリの町で見るアフィッシュなどについて長々と講釈する姿からも、語り手のそのような静かな独身生活の〈外界〉へ脱する気持ちをはっきりと窺えるだろう。名乗られない語り手の語りだけで創作されている第一節の重要性は、語り手のそのような気持ちや内面をはっきり示することにあるのではないか。それだけではなく、「独身」という物語全体の語る動機について考察すれば、やはり、それも静かな独身生活から脱する一つの試みだと考えられる。だが、「独身」の語り手に関する考察は、この程度でとどまらない。次に自分の語りに対する〈意識〉に触れたい。まず、次の部分を見てみよう。

そういう時には走使が欲しいに違ない。会社の徽章の附いた帽を被って、辻々に立っていて、手紙を市内へ届けることでも、途中で買って邪魔になるものを自宅へ持って帰らせる事でも、何でも受け合うのが伝便である。手紙や品物と引換に、会社の印の据わっている紙切をくれる。存外間違はないのである。小倉で伝便と云っているのが、この走使である。

伝便の講釈がつい長くなった。（壺）

これは、語り手が伝便の紹介を長くした場面であるが、下線部のように、「伝便の講釈がつい長くなった」という部分から、聞き手を意識しているだけではなく、語りながら自分のことも意識していることが分かる。さらに、語り手のモダンで教養的な性格がテキストから窺える。例えば、「これは東京に輸入せられないうちに、小倉へ西洋から輸入せられている二つの風俗の一つである」という部分および、「画だっても、巴里の町で見るafficheのように気の利いたのはない」という二箇所、パリの町で見られる絵、東京にまだない最新式の風俗に関して知識を持っていることから、語り手が割とモダンな人物である

うかと言えるのではないか。また、Rendez Vous（＝逢引き）、Affiche（＝広告）をわざわざフランス語で言うことは、語り手の教養的な側面を反映していると思われる。

さらに、教育的な語り口という部分も看過できない。伝便を紹介する場面で次のような箇所も見られる。

今一つが伝便なのである。Heinrich von Stephan が警察国に生れて、巧に郵便の網を天下に布いてから、手紙の往復に不便はないはずではあるが、それは日を以て算し月を以て算する用弁の事である。  
(壺)

ここで注目されるのは、「伝便」を紹介する中で、国際郵便連盟を設立した Heinrich von Stephan (ハインリヒフォンステファン) を持ち出し、Heinrich (ハインリヒ) の生まれたドイツは「警察国」であるとわざわざ述べることは、語り手の教育的な語り方を明示するのではないかと考える。

次に取り上げるのは、大野の家に対する知識である。「弐」では、下女の「竹が台所から出て来て、饅頭の代りを勧める」と、富田が手を揮って「もういけない。饅頭はもう御免だ。この家にも奥さんがいれば、僕は黙って饅頭で酒なんぞは飲まないのだ」という場面があるが、そこで、語り手が「これが口火になって、有妻無妻という議論が燃え上がった」と自分のなりコメントを付ける。そして、「この部屋で此等の人の口からこの議論が出たのは、決して今夜が初めではない」という部分から、語り手のこの家やお客さんのことを大分前から知っている印象を受ける。また、「この家では茶を煮るときは、名物の鶴の子より旨いというので、焼芋を買わせる」とあるが、下線部の「この家では」というような言い方が語り手の「この家」に対する知識や馴染みの感情を明示すると考えられる。さらに、下女の「竹」に関する次の箇所も挙げよう。

初め奉公に来た時は痩せて蒼い顔をしていて、しおらしいような処があった。それがこの家に来てから段々肥えて、頬っぺたが膨

らんで来た。(六)

ここでは「この家に来てから」という部分は、竹が来る前に大野の家のことを知っている語り手の姿を示していると言える。さらに、「この部屋で・・・決して今夜が初めではない」、「この家では」、「この家に来てから」などという言い方が語り手の大野の家に対する馴染みを明示するのではないか。

次に、「私見」を述べる語り手に着目したい。「独身」の語り手が自分の意見をよく述べることが看過できない。例えば、次の二箇所を見てみよう。

小倉の冬は冬という程の事<sup>①</sup>はない。西北の海から長門の一角を掠めて、寒い風が吹いて来て、蜜柑の木の枯葉を庭の砂の上に吹き落して、からからと音をさせて、庭のあちこちへ吹き遣って、暫くおもちゃにっていて、とうとう縁の下に吹き込んでしまう。そういう日が暮れると、どこの家でも宵のうちから戸を締めてしまう。(壺)

こんな晩には置炬燵をする人もあろう。しかし実はそれ程寒く<sup>②</sup>はない。(壺)

作品を傍点部①のような冒頭で始めてから、二重線部で小倉の冬の寒さに言及するのに、最終に傍点部②のような個人的な意見を強く強調し、四角に囲った「・・・はない」というはっきりした否定形を使うことが二箇所に見られる。また、自分の評価や感想を語る姿が次の二箇所にも見られる。次は一つ目である。

赤や青や黄な紙に、大きい文字だの、あらい筆使いの画だのを書いて、新らしく開けた店の広告、それから芝居見せものなどの興行の広告をするのである。勿論柱はただ一本だけであって、(中



略) しかし兎に角広告柱があるだけはえらい。(壺)

ここでは、まだ東京に導入されていない小倉の広告の風俗を紹介するだけではなく、下線部のように広告柱があることを褒める語り手の姿が窺える。二つ目は、「しかし性急な変で、今晚何処で逢おうとなつては、郵便は駄目である。そんな時に電報を打つ人もあるかも知れない。これは少し牛刀鶏を割く嫌がある」という箇所であるが、ここでも下線部から分るように語り手の個人的な意見が明示されているのである。また、**登場人物の性質**に関する意見を述べる語り手の姿も看過できない。例えば、「戸川は主人のために気の毒に思つて、半ば無意識に話を外へ転じようとした。そして持前のしんねりむつつりした様子で、妙な話をし出した」という部分で、戸川的心情をはっきりと言わない性格に関する自分の意見をはっきりと述べる語り手の姿が窺える。また、戸川が語る下女と結婚した宮沢の話を「妙」だとはっきり述べる他、富田の態度を卑しく思うと、「富田は意地きたなげに、酒をちびちび飲みながら冷かした」と、はっきり批判する姿も見られる。

ここでは、一纏めをすると、登場人物の性質や出来事に関する自分の印象や意見をしばしば述べることによって、語り手が自分の存在を強調することになると考える。強いていえば、語り手が独立した登場人物のような存在だと思えるのである。

では、主人を揶揄する語り手に触れたい。先ず、作品の最後の文章という次の箇所を挙げよう。

読んでしまった大野は、竹が机の傍へ出して置いた雪洞に火を附けて、それを持って、ランプを吹き消して起つた。これから独寝の冷たい床に這入ってどんな夢を見ることやら。(六)

傍点部のような部分から、先ほど下女のお竹を「女として」見ようとしたり、「戦死者」のために法会をした時、自分の膝の間の所へ、しゃがんだ島田に結った百姓の娘を想像したりしていた主人の大野を揶揄する語り手の姿が見られる。また、次の傍点部も見てみよう。

主人が帝国採炭会社の理事長になって小倉に来てから、もう二年立った。その内大野の独身生活は小倉で名高いものになっていて、随って度々問題に上る。

主人は全く女というものなしに暮らしているのだろうか。(弐)

ここの傍点部は、果たして主人が全く女なしで生きているのであるうか、いや、そんな筈はないであろうという風なニュアンスがあり、「独身」の主人をからかう語り手の姿をはっきりと表していると思われる<sup>(4)</sup>。

語り手に関する考察は、この程度にとどまらない。続いて、登場人物の内面が窺える語り手の特徴も指摘したい。まず、「戸川は主人のために気の毒に思っ、半ば無意識に話を外へ転じようとした」とあるが、この部分は、戸川自身が意識しない自分の行動が語り手に窺われる場面である。また、下女の竹に対して何の性的な感情が起こらなかった大野は次のように、「自分の冷澹なのを、やや訝るような心持になった。この心持が妙に反抗的に、自分のどこかに異性に対する感じが潜んでいはしないかと捜すような心持を呼び起した」という部分からも、主人の大野の心理を察する語り手の姿が確認できる。さらに、次の二箇所も挙げよう。

大野の想像には、小倉で戦死者のために法会をした時の事が浮ぶ。(中略)段々見物人が押して来て、大野の膝の間の処へ、島田に結った百姓の娘がしゃがんだ。お 白いと髪の毛の油とのがする。途中まで聞いていた誰やらの演説が、ただ雑音のように耳に聞えて、(後略)。(六)

この島田に掛けた緋鹿子を見る視官と、この髪や肌から発散する匂を嗅ぐ嗅覚とに、暫くの間自分の心が全く奪われていたのである。この一刹那には大野も慥かに官能の奴隷であった。(六)

この二箇所の下線部は、大野の想像に浮かび上がる戦死者の法会の時の出来事や、大野の心理状態を十分に窺っている語り手の特徴を明示している。また、そのような語り手はお祖母さんの手紙を開けるとともに、「行儀の好いお家流の細字を見れば、あの角縁の目金を掛けたお祖母あさんの顔を見るよう」に思う大野の心持ちの一面を明白に分かることが見られる。しかし、この語り手が登場人物の内面や心持ちのすべてが分かっているとは言えない。何故なら、例えば、第五節で寧国寺さんのお坊さんが帰ろうとすると、次のように「寧国寺さんは、主人と顔を見合せて、不断の微笑を浮べて聞いていたが、「お休なさい」と云って、ついと起った。見送りに立つ暇もない」とあるが、第四節の始め辺りに登場するお坊さんの来た場面を見てみると、「皆の顔を見て会釈」するが、語り手がお坊さんのその態度の原因について何も語らないことが注目される。単なる「この坊さんはいつでも飄然として来て飄然として去るのである」としか述べない。また、何故主人が結婚しないのかということにも一切触れないのである。ただ「主人は全く女というものなしに暮らしているのだろうか」という疑問をもって主人を揶揄するくらいである。

以上のように、特に第一節の分析で〈外界〉へ意識を払っている語り手の姿が明らかに見えてきた。それは、静かな独身生活から〈外界〉へ〈脱出〉をしようとする気持ちから来るものではないか。そこで、第二節～第六節までの話とそれほど深く関わらない第一節の構造的な重要性が分かることができた。また、〈外〉をよく意識をする語り手は、まず、〈内〉の大野の静かな独身生活を暗示する。それだけではなく、そのような〈外〉を著しく意識すること、自分の語りへの意識、聞き手への意識、教養的な口調、自分の印象や私見を述べることなどで、自分の個性を明示し、自分の存在を強調すると言えるのではないか。

## ② 大野に関する語り

ここでは、大野に関する語りにも触れたい。大野の家を訪ねる三人のお客に関する次のやや長い二箇所を見てみよう。

新魚町の大野豊の家に二人の客が落ち合った。一人は裁判所長の戸川という胡麻塩頭の男である。一人は富田という市病院長で、東京大学を卒業してから、この土地へ来て洋行の費用を貯えているのである。費用も大概出来たので、近いうちに北川という若い医学士に跡を譲って、出発すると云っている。富田院長も四十は越しているが、まだ五分刈頭に白い筋も交らない。酒好だということが一寸見ても知れる、太った赭顔の男である。（弐）

間もなく香染の衣を着た坊さんが、鬚の二分程延びた顔をして這入って来た。（中略）寧国寺さんという曹洞宗の坊さんなのである。金田町の鉄道線路に近い処に、長い間廃寺のようになっていた寧国寺という寺がある。檀家であった元小倉藩の士族が大方豊津へ遷ってしまったので、廃寺のようになったのであった。辻堂を大きくしたようなこの寺の本堂の壁に、新聞反古を張って、この坊さんが近頃住まっているのである。（四）

ここで注目に値するのは、語り手が三人のお客について詳細な紹介をするが、大野について同じような紹介をしないことである。語りたいことに応じて大野のことを少しずつしか語らない。例えば、次の部分を見てみよう。

主人が帝国採炭会社の理事長になって小倉に来てから、もう二年立った。その内大野の独身生活は小倉で名高いものになっていて、随って度々問題に上る。（弐）

富田や戸川が「有妻無妻という議論」をする場面になると、大野のポジションや独身生活などについて語る。また、終章でお嫁としての富子を勧めるお祖母さんの手紙について語る時、大野について「大野は今年四十になる。一度持った妻に別れたのは、久しい前の事である」とあるような簡潔なことしか述べない。それだけではなく、次の箇所も挙げよう。

主人は全く女というものなしに暮らしているのだろうか。 富田もこの問題のために頭を悩ました一人である。（弐）

このように、語り手がただ疑問文で語り、大野の女性との関係などに全く触れないことが注目される。さらに、「読んでしまった大野は、竹が机の傍へ出して置いた雪洞に火を附けて、それを持って、ランプを吹き消して起った。これから独寝の冷たい床に這入ってどんな夢を見ることやら」というこの作品の結末からも、お祖母さんの手紙を読み終わった大野の心理について一切言及しない語り手の姿を明らかに窺える。以上のように、語り手が主人の内面の一面を窺えていても、あまり大野の紹介や心理について踏み込んで語らないことが分かる。それだけではなく、異性と関係、何故独身生活をしているかなどについて一切言及しない態度をとっていることも指摘できる。そのようなことから「独身」の語り手は全知ではないと言えよう。

## 二、語り手としての「お祖母さん」

ここでは、語り手としての「お祖母さん」の特徴や語り方などについて考察を進めたい。まず、次の二箇所を見てみよう。

私と谷田の奥さんにて先に参りをり候処へ、富子さん母上と御一しよに来られ、車を降りて立ち居られ候高島田の姿を、初て見候時には、実に驚き申候。世の中にはこの様なる美しき人もあるものかと、不思議に思はれ候程に候。性質は一度逢ひしのみにて何とも申されず候へども、伶俐なることは慥かに候。（六）

何は兎もあれ、御前様の一日も早く御上京なされ候て、私の眼鏡の違はざることを御認なされ候を、ひたすら待入候。（六）

下線部は富子の美貌、賢さについての自信に満ちている語り口で、大野を必死に説得しようとするお祖母さんが、如何に富子と結婚してほしいかを明示する。また、次の箇所を挙げよう。

尤前便に申上候通、不幸なる境遇に居られし人なれば、同じ年頃の娘とは違ふ所もあるべき道理かと存じ候。（六）

同年の娘と違う所で大野の関心を惹き起こすことは、大野の〈女性像〉が富子と同年の娘たちからかけ離れているのを暗示するのではないか。また、「この人を見せたらば、いかに女嫌の御前様もいやとは申さるまじと存じ候」という部分から、お祖母さんは「独身」の語り手が教えてくれない大野の性格の一面を明らかにしてくれると言える。さらに、語り手としてのお祖母さんの特徴を明示する次の箇所も見てみよう。

ただ一つ不思議に思はれしは、茶店に憩ひて一時間ばかりもゐたるに、富子さんは一度も笑はざりし事に候。（六）

この部分から富田さんを必死に勧めながら、正直でありたい語り手のお祖母さんの姿が窺える。このように、語り手のお祖母さんは「独身」の語り手が教えてくれない大野の〈女性像〉や「女嫌」ということを明らかにしてくれることが分かる。以上のことを漢数字一の「②大野に関する語り」のまとめと合わせて考察すると、「独身」の語り手が大野についてあまり踏み込んで語らないことは、大野という人物に対して中立の立場をとっているのを意味するのではないか。

### 三、語り手としての「戸川」

続いて、語り手としての「戸川」についても考察したい。「戸川」の語りが「独身」全体を語っている名乗られていない語り手と幾つかの点でよく似ている。例えば、下記の点を挙げよう。

#### ① 〈外界〉への意識

「戸川」が語る宮沢の話から次の箇所を見てみよう。

宮沢が欠をする。下女が欠を噬み殺す。そういう風で大分の間過ぎたのだそうだ。そのうちある晩風雪になって、雨戸の外では風の音がひゅうひゅうとして、庭に植えてある竹がおりおり箒で掃くように戸を摩る。（参）

この下線部から、先ず語り手の「戸川」が〈外界〉を意識しながら語っていることが分かる。それを「独身」全体を語っている語り手の下記の台詞と見合わせてみよう。

西北の海から長門の一角を掠めて、寒い風が吹いて来て、蜜柑の木の枯葉を庭の砂の上に吹き落して、からからと音をさせて、庭のあちこちへ吹き遣って、暫くおもちゃにしていた、とうとう縁の下に吹き込んでしまう。そういう日が暮れると、どこの家でも宵のうちから戸を締めてしまう。（中略）外はいつか雪になる。（壺）

風の音がひゅうと云う。竹が薬缶を持って、急須に湯を差しに来て、『上はすっかり晴れました』と云った。（壺）

これらの箇所を先に挙げた「戸川」の語り方とかなり似通っているのではないか。特に、外の雪、ひゅうとする風の音、庭の様子などというところである。

## ② 自分の語りに対する〈意識〉

ここでは、（参）からの次の箇所を挙げよう。

「いや。実は宮沢が後悔して、僕にあんまり精しく話したもんだから、僕の話もつい精しくなったのだ」（参）

二重下線部から「戸川」の自分の詳細な語り方という行為に対する〈自意識〉が見られる。そのような自分の語りに対する〈自意識〉を持つ「独身」の語り手の姿は、（壺）にも注目される。例えば、「そ

ういう時には走使が欲しいに違ない。会社の徽章の附いた帽を被って、辻々に立っていて、手紙を市内へ届けることでも、途中で買って邪魔になるものを自宅へ持って帰らせる事でも、何でも受け合うのが伝便である。手紙や品物と引換に、会社の印の据わっている紙切をくれる。存外間違はないのである。小倉で伝便と云っているのが、この走使である。伝便の講釈がつい長くなった」というやや長い箇所である。以上の二重下線部を合わせて考察すると、両者の語り手（語り手としての「戸川」と「独身」全体の語り手と）が自分の長くて詳しい語り方への〈自意識〉を隠そうともしない姿が明瞭に窺えるのではないか。

### ③ 聞き手への意識

さらに、聞き手を意識する語り方にも着目したい。まず、（参）にある「『御承知のような土地柄だろう。裁判所の近処に、小さい借屋をして、下女を一人使っていた』」という部分で、語りながら富田や大野などという聞き手を意識していることが見られる。また、次の箇所を見てみよう。

「どうも富田君は交っ返すから困る。兎に角それから下女が下女でなくなった。」（参）

この部分では、語り手の「戸川」が自分の語りを僅かに遮って、聞き手の富田に注意を払って、また語り続けることが注目される。それも、如何に富田を意識しているかを明示しているのである。さらに、次の箇所も挙げよう。

「跡は端折って話すよ。しかも一つ具体的に話したい事がある。それはこうなのだ。（中略）これだけ話してしまえば跡は本当に端折るよ。」（参）

この部分からは、まず、語り手の「戸川」が自分の詳細な語り方を〈自意識〉することが強調されるのではないか。また、下線部も「戸川」の遠慮深い性質を強調するのである。さらに、「戸川」の自分の



語りに対する〈自意識〉だけではなく、聞き手に対する気遣いや意識を明示していると思われる。また、そのような聞き手への意識は、以上の漢数字一の「① 自分の個性が分かる語り方」で触れた聞き手への意識とよく似ている。以上の考察から、「独身」の名乗られていない語り手も「戸川」も〈外界〉への意識、自分の語り方に対する〈自意識〉、聞き手への意識を持っている点で共通しているということが分る。言い換えれば、以上のように分析してくると、「独身」全体の語り手と語り手としての「戸川」の類似性が明白に窺えるのではないか。

#### 四、様々な〈微笑〉について

これまでは、「独身」の語り手について述べてみたが、ここでは「独身」を論じるにあたって、看過できない〈微笑〉も取り上げたい。次に、鷗外の他の作品と似ている〈微笑〉に触れ、さらに夏目漱石『我輩は猫である』と似ている〈笑い〉について考察を進めたい。

##### ① 大野の〈微笑〉について

さて、富田や戸川に独身生活の攻撃を受けている主人の大野が始終〈微笑〉を浮かべていることが注目される。お客さんが帰って、一人になっても、大野の〈微笑〉が絶えない。つまり、大野がよく微笑む人物として設定されている。ここでは、攻撃されている大野の〈微笑〉の意味について考えてみたい。

##### 1. 来客がいる時

最初に、「独身」の第二節～第五節に見られる三人の客、つまり裁判所の戸川と市の病院長の富田とそれにやや遅れてきた寧国寺さんが訪問している時の大野の〈微笑〉を取り上げたい。古郡康人「森鷗外『独身』論」<sup>(1)</sup>において「大野は、微笑によって、二人の客の話が意味する習慣・習俗への屈服としての結婚を認容しないことを示す」と述べている。しかし、富田の攻撃に対して、大野は〈微笑〉だけをほぼ一貫して維持しているだけではなく、「三宝」の講釈以外にほと

んど話したがらないことも注目されるので、何故独身生活を続けているか明瞭に分からない。それ故、果たして古郡氏が主張するように、大野が「習慣・習俗への屈服としての結婚」そのものを認容していいであろうか。乃至は、お祖母さんの手紙から分かるように、大野が習慣としての結婚というより「女嫌」であろうか。いずれにせよ、何故独身生活を続けているのかというより、大野の〈微笑〉について考察を進めたい。では、次の箇所を見てみよう。

主人は饅頭だけ相伴して、無頓着らしい顔に笑を湛えながら、二人の酒を飲むのを見ている。話はしめやかである。（弐）

ごく淡泊な生活をしている大野は、来客に煮たうどんと酒だけを出して、酒を飲まない自分がうどんだけを食べながら、下線部のように「無頓着らしい顔に笑を湛えながら」、二人の客と向き合っている。主人が結婚していたら、「饅頭だけ」で酒を飲んでばかりはいないと、富田が訴えることで〈有妻無妻〉の議論になり、独身生活の攻撃も始まる。だが、この場面で見られる主人の〈笑〉の意味は何であろう。また、その直前の「無頓着らしい顔」とあるが、何故「無頓着」なのであろうか、あるいは何に対して「無頓着」なのであろうかという疑問を抱かざるを得ない。その疑問を次の箇所と合わせて考察を進めたい。

この部屋で此等の人の口からこの議論が出たのは、決して今夜が初めではない。（弐）

この部分からは、主人が今夜も同じ話題が出ることを予期していたので、「無頓着な顔に笑」を浮かべていたのではないか。つまり、大野が〈微笑〉で自分が攻撃を予期している気持ちを隠そうとしているだろうと考えられる。他に、いつものように「饅頭」と「酒」という淡泊なものをしか出さない主人が来客に文句を言われるのではないかと思っていたので、その「無頓着な顔に笑」を浮かべていたのであろう。この場合にも、大野の〈微笑〉が自分の気持ちを紛らわすものとして設定されているのではないか。

さらに、大野及びその来客の性質を視野に入れて考察すると、何故大野がそのような〈微笑〉を浮かべているかが分かるだろう。詳しく言えば、大野の人物像が仏法の講釈以外に、ほとんど無口であるのに対して、裁判所長の戸川が「妙な話をし出す人物として描写されており、富田も「笑う声がおおりおり全体の調子を破って高くなる」とある。そこで、主人が「無頓着な顔に微笑み」を浮かべていることによって、富田のそのような態度に対する自分の内心を隠そうとしているのではないか。

続いて、来客が独身攻撃を始める次の場面も見てみよう。

「どうも小倉には御主人のお目に留まったものがなさそうだ。多分馬関だろうと思って、僕は随分熱心に聞いて廻ったのだが、結果が陰性だった。」

「随分御苦勞なわけだね」と、遠慮深い戸川は主人の顔を見て云った。

主人はただにやりにやり笑っている。（弐）

富田の大野に対する女性調査と陰性の結果が出たという話に対して、下線部から分るように大野は自分の気持ちを表面に出さずに、ただ〈微笑〉だけで対抗する。また、ここで注目されるのは、語り手が大野の気持ちについてはっきりと何も述べないことである。果たして大野はどのような気持ちで笑っているのであろうか。まず富田が酒に酔っているから、ただ〈微笑〉だけが一番効果的な策略であるという気持ちで笑っていると考えられる。次に、「この部屋で此等の人の口からこの議論が出たのは、決して今夜が初めではない」ことを視野に入れながら考察すると、またいつものような話になってきたので、大野が仕方がない気持ちで笑っていることも考えられる。いずれにしても、大野は自分の気持ちを表面に出さずに、ただ〈微笑〉で対抗することが分かる。つまり、この〈笑い〉は、**対抗策の役**があると言えよう。

また、戸川が友人の宮沢の話を持ち出す場面からの次の箇所を挙げよう。

下女がある晩、お休なさいと云って、隣の間へ引き下がってから、宮沢が寐られないでいると、壁を隔てて下女が溜息をしては寝返りをするのが聞える。暫く聞いていると、その溜息が段々大きくなって、苦痛のために呻吟するというような風になったそうだ。そこで宮沢がつい、どうかしたのかいと云った。（参）

下線部のように、性的な衝動となる宮沢の下女の行動が見られる。そこで、富田が「『おい。お竹さん。好く聞いて置くが好いぜ』」という風に竹の注目を宮沢の下女の衝動的な行為に寄せると、「始終にやにや笑っていた主人の大野が顔を蹙め」ることが見られる。それはむしろ竹が宮沢の下女のような行動をすると、主人が困ってしまうからであると言うまでもない。もう一つ考えられるのは、主人の大野が竹を「これまで一度も女だと思ったことがなかった」にもかかわらず、来客が帰った後の次の場面がある。

竹が出て来て、酒や茶の道具を片附けている。主人の大野は、見るともなしにそれを見ていたが、ふいと竹を女として視ようとした。（六）

下線部のような主人の下女に対す行動変更は、宮沢の話を聞いた影響なのではないかと考えられる。つまり、宮沢の話を聞いていた独身の主人が内心で竹のことを異性のものとして見る感慨になっていたかも知れない。とすれば、竹が宮沢の下女の行動に注目し、同様な気になってしまうことを心配した大野の〈微笑〉が消えてしまうと読み取れるのではないか。要するに、大野の〈微笑〉の裏に竹を異性として見る気持ち秘められていると言えるのではないか。

さらに、大野の〈微笑〉をより掘り下げよう。次の箇所を見てみよう。

主人は笑談のような、真面目のような、不得要領な顔をしてこんな事を言った。「そうでないよ。君は科学科学と云っているだろう。あれも法なのだ。君達の仲間崇拝している大先生がある

だろう。Authoritaeten だね。あれは皆仏なのだ。そして君達は皆僧なのだ。それからどうかすると先生を退治しようとするねえ。

Authoritaeten-Stuermerei というのだね。あれは仏を呵し祖を罵るのだね。」（四）

これまで〈微笑〉だけで対抗していた大野は、富田が一切分からない三宝についての長い講釈で独身攻撃を紛らわそうとすることが注目される。その結果、富田が「一寸顔を蹙めて」、「溜まらない」感じがしており、一方、大野が「にやにやと笑っている」のである。この場面においても、語り手が大野の心持ちについて何も述べていないので、大野はどのような気持ちで笑っているのかははっきり書かれていない。しかし、ここで見られる大野の〈微笑〉がこれまでのと性質が違うものだと考える。つまり、これまでの〈微笑〉が富田の攻撃に対する一種の対抗であったが、この場面で見られる大野の〈微笑〉は、独身の自分を激しく攻撃している富田に三宝の講釈で不愉快な思いをさせたことから来るものではないか。最後に、来客が帰る直前の場面を取り上げたい。

富田は幅の広い顔に幅の広い笑を見せた。「ところが、まだなかなか帰られないよ。独身生活を berufsmaessig に遣っている先生の退却した迹あとで、最後の突撃を加えなけりゃあならないからな。」（中略）主人の無頓着らしい顔には、富田がいくら管を巻いてもやはり微笑の影が消えない。（五）

ここでは、富田が攻撃をし続けても、大野が〈微笑〉で対抗する態度を最後まで保っていることが看過できない。以上のように、大野が〈微笑〉をほぼ一貫して維持されていることは、来客の攻撃に対して一番効果的な手段である。このように、なぜ独身生活を続けているかに触れることが避けられる。更に、自分が「女嫌」であることも明らかにしないままで来客に付き合える。換言すれば、大野の〈微笑〉が客に自分の本心を見破られないためのものであると言えよう。

## 2. 来客が帰った後

続いて、三人の客が帰った後の大野の〈微笑〉にも触れたい。客が帰ってからも大野の〈微笑〉が絶え間ないことが看過できない。例えば、次の二箇所を挙げよう。

竹が出て来て、酒や茶の道具を片附けている。主人の大野は、見るともなしにそれを見ていたが、ふいと竹を女として視ようとした。（中略）道具を片附けてしまつて起つて行くのを、主人は見送つて、覚えぬ微笑した。（六）

大野の想像には、小倉で戦死者のために法会をした時の事が浮ぶ。（中略）大野の膝の間の処へ、島田に結つた百姓の娘がしゃがんだ。お白いと髪のおとのがする。（中略）この島田に掛けた緋鹿子を見る視官と、この髪や肌から発散する匂を嗅ぐ嗅覚とに、暫くの間自分の心が全く奪われていたのである。（中略）大野はその時の事を思い出して、また覚えぬ微笑した。（六）

やや長い引用であるが、下線部のように二箇所ともに見られる大野の〈微笑〉が「性」への関心を明らかにするものであろう。従つて、来客中の防御策としての〈微笑〉が、「性」への関心を明示するものへ変わることが言えるのではないか。

### ② 寧国寺さんの〈微笑〉

宮沢の話が終わるところに、曹洞宗の寧国寺さんという三人目のお客が来る。寧国寺さんは「寧国寺さんはほとんど無間斷に微笑を湛えている」人物である。彼が古本屋でのことを主人に話すと、富田が次のような議論を大野に吹っ掛ける。

「一体御主人の博聞強記は好いが、科学を遣っているくせに仏法の本なんかを読むのは分らないて。仏法の本は坊様が読めば好いではないか。」

寧国寺さんは饅頭をゆっくり食べながら、顔には相変らず微笑

を湛えている。（四）

下線部のように、寧国寺さんはいつも通りの〈微笑〉を浮かべている。また、「羊羹を食べて茶を喫みながら、相変わらず微笑している」という一文もある。更に、「寧国寺さんは、主人と顔を見合せて、不断の微笑を浮べて聞いていた」ことなどが見過ごせない。波線部の絶え間ない〈微笑〉が寧国寺さんの仕事の影響であろう。つまり、このような〈微笑〉が世俗の雑事との関わりを断ち切っているお坊さんたちの顔に見られる普段の〈表情〉ではないかと考える。

### ③ 笑うお祖母さん達と笑わない富子

最後に、花嫁候補としての富子及びお祖母さん達について考察したい。まず、次の箇所を見てみよう。

性質は一度逢ひしのみにて何とも申されず候へども、怜悯なることは慥かに候。ただ一つ不思議に思はれしは、茶店に憩ひて一時間ばかりもゐたるに、富子さんは一度も笑はざりし事に候。（六）

下線部のように花嫁候補としての富子が笑わない女として描かれるが、「女嫌」大野の気に入る相手とお祖母さんが明記する事は、大野の女性像を明示してくれる。また、谷田の奥さんが通弁訳している場面も挙げよう。

丁度西洋人の一組同じ茶店にゐて、言語通ぜざるため、色々をかしき事などありて、谷田の奥さん例の達者なる英語にて通弁をして遣され、富子さんの母上も私も笑ひ候に、富子さんは少しも笑はずにをられ候。（六）

お祖母さんや富子のお母さんの〈笑い〉が、外国人と英語でコミュニケーションができない恥ずかしさの〈表情〉であろう。また、富子が笑わないのは、明記されていないが、他人との不調和を感じているからかもしれない。

以上のように、「独身」に様々な〈微笑〉・〈笑い〉の意味が見られる。例えば、大野がほぼ一貫して維持してきた沈黙と〈微笑〉が独身攻撃に対する対抗手段だと思われる。寧国寺さんの〈微笑〉は、俗世の雑事との関わりを断ち切っている特徴的な表情である。また、富田が語った箕村の話が主人に結婚を促す〈笑い話〉として聞ける。英語ができないお祖母さん達の〈笑い〉が恥ずかしさの表情だと思われる。

## 五、他の作品の似ている〈微笑〉

### ① 森鷗外「鶏」

ここでは、他の作品の似ている〈微笑〉について調べてみたい。まず、小倉を作品舞台にした一つ目の作品である「鶏」を取り上げる。

「鶏」は明治42年8月に『スバル』に発表され、軍人の石田小介の小倉の着任直後の私生活を描いた作品である。主人公が「独身」の大野と同様に〈微笑〉をよく浮かべていることに注目したい。例えば、女は婆さんが台所の物をごまかして、自分の内の暮しを立てていること、別当が馬の麦をごまかして金を溜めようとしていることを主人に声を張り上げて暴露する場面がある。そこで、石田が女の話聞いてると、次のような反応をする。

石田は花壇の前に棒のように立って、しゃべる女の方へ真向に向いて、黙って聞いている。顔にはおりおり微笑の影が、風の無い日に木葉が揺らぐように動く外には、何の表情もない。軍服を着て上官の小言を聞いている時と大抵同じ事ではあるが、少し筋肉が弛んでいるだけ違う。微笑の浮ぶのを制せないだけ違う。

下線部から分かるように、石田がおりおり微笑を浮かべている。また、別当のごまかしを確認した後、次のように反応する。

石田は「そうか」と云って、ついと部屋に帰った。（中略）偶には上等の葉巻を呑む。そして友達と雑談をするとき、「小説家な



んぞは物を知らない、金剛石入の指環を嵌めた金持の主人公に  
Manila を吞ませる」なぞと云って笑うのである。

ここでも、別当が枡を使っていないことを確認しても、平気な気持ちでタバコを吸って笑うことが見られる。最後に、結末の部分も挙げよう。

石田はついに立って奥に這入った。虎吉は春に、「旦那からお暇が出たのだかどうか、伺ってくれろ」と頼んだ。石田は笑って、「己はそんな事は云わなかったと云え」と云った。

この部分は、下女に別当に暇が出されたかを確認しに行く場面であるが、落ち着いて花火を眺めている石田の笑っている姿が窺える。以上のところから、「独身」の大野の「覚えず微笑む」ような〈微笑〉が石田という人物にも見られる。鷗外自身だと思われる<sup>(2)</sup>「独身」の大野や「鶏」の石田が鷗外の精神的な余裕<sup>(3)</sup>を明示していると考ええる。

## ② 森鷗外「カズイスチカ」

次に、明治四四年二月に「三田文学」に発表された「カズイスチカ」の花房の父の〈微笑〉に注目したい。まず、次の箇所を見てみよう。

盆栽と煎茶とが翁の道楽であった。（中略）茶碗の底には五立方センチメートル位の濃い帯緑黄色の汁が落ちている。花房はそれを舐めさせられるのである。甘みは微かで、苦みの勝ったこの茶をも、花房は翁の微笑と共に味わって、それを埋合せにしていた。

ここでは、老花房が自分の好きな煎茶を息子に飲ませる場面であるが、下線部のように翁の微笑が見られる。また、次の部分にある微笑も挙げよう。

息子さんは誰やらと札の引張合いをして勝ったのが愉快だというので、大声に笑った拍子に、顎が両方一度に脱れた。それから大

騒ぎになって、近所の医者に見て貰ったが、嵌めてはくれなかった。このままで直らなかつたらどうしようというので、息子よりはお上さんが心配して、とうとう寐られなかつたというのである。

「どうだね」

と、翁は微笑みながら、若い学士の顔を見て云った。

これは、顎が外れた病人がある場面であるが、老花房が相変わらず微笑しながら、若花房に任せるのである。さらに、若花房が上手に顎を嵌めた反応も看過できない。

二十の涎繰りは、今まで腮を押えていた手拭で涙を拭いた。お上さんも袂から手拭を出して嬉し涙を拭いた。

花房はしたり顔に父の顔を見た。父は相変わらず微笑んでいる。

以上、下線部のようにこの短編においては「相変わらず微笑んでいる」老花房の姿が見られる。それは本論の四番目の項目の「② 寧国寺さんの〈微笑〉」で付した波線部と合わせて考察すると、「カズイスチカ」の老花房と「独身」の寧国寺さんは「相変わらず」〈微笑〉を浮かべている点で似通っている人物だと指摘できるのではないか。

## 六、夏目漱石「吾輩は猫である」との比較

### ①「独身」の大野の〈笑い〉と似ているもの

最後に、夏目漱石『吾輩は猫である』との比較をしてみたい。周知のように『吾輩は猫である』の〈笑い〉は、ほとんど「独身」のと同質のものではないが、ここでは、両作品に見られる同質の〈笑い〉に触れてみたい。まず、次の場面を見てみよう。

「その朗読会さ。せんだってトチメンボーを御馳走した時にね。その話しが出たよ。何でも第二回には知名の文士を招待して大会をやるつもりだから、先生にも是非御臨席を願いたいって。それから僕が今度も近松の世話物をやるつもりかいと聞くと、いえこ

の次はずっと新しい者を撰んで金色夜叉にしましたと云うから、君にゃ何の役が当てるかと聞いたら私は御宮ですといったのさ。東風の御宮は面白かろう。僕は是非出席して喝采しようと思ってるよ」「面白いでしょう」と寒月君が妙な笑い方をする。「しかしあの男はどこまでも誠実で軽薄なところがないから好い。迷亭などとは大違いだ」と主人はアンドレア・デル・サルと孔雀の舌とトチメンボーの復讐を一度にとる。迷亭君は気にも留めない様子で「どうせ僕などは行徳の俎と云う格だからなあ」と笑う。

(二)

これは迷亭がくしゃみ先生に東風の朗読会について話しているや、や長い箇所であるが、くしゃみ先生は、東風が金色夜叉の御宮の役をやるのを、面白い面白いと言って笑っている迷亭に向かって、下線部のようにこれまでの「アンドレア・デル・サルと孔雀の舌とトチメンボーの復讐を一度にとる」ことが見られる。このようにして、迷亭が「独身」の大野的な〈笑い〉で主人の攻撃に対抗すると言えよう。また、次の二箇所も挙げよう。

「いえそれはほんの冒頭なので、本論はこれからなのです」「ふーん」と主人は好奇的な感投詞を挟む。「それから、とてもなめくじや蛙は食おうっても食えやしないから、まあトチメンボーくらいなところで負けとく事にしよう・・・」(中略)「それからどうしました」と主人は無頓着に聞く。(二)

「するとボイも気の毒だと見えて、その内材料が参りましたら、どうか願いますってんでしょ。先生が材料は何を使うかねと問われるとボイはへへへへと笑って返事をしないんです。材料は日本派の俳人だろうと先生が押し返して聞くとボイはへえさようで、それだものだから近頃は横浜へ行っても買われませんので、まことにお気の毒様と云いましたよ」「アハハそれが落ちなんですか、こりゃ面白い」と主人はいつになく大きな声で笑う。膝が揺れて吾輩は落ちかかる。主人はそれにも頓着なく笑う。アンドレ

ア・デル・サルトに雇ったのは自分一人でないと言う事を知ったので急に愉快になったものと見える。（二）

これは主人がトチメンボーの長い話を無頓着に聞く場面である。ここで見られる主人の無頓着な〈笑い〉も、「独身」の（五）にある「にやにや笑っている」大野の〈笑い〉も同質だと考える。これまで激しく攻撃されていた大野が富田に少し嫌な気持ちをさせると、「にやにや」笑うのは、愉快になったためであろう。つまり、二人とも主人の〈笑い〉は、自分だけが雇ったり、攻撃されて嫌に思ったりしているだけではなく、相手も自分と同じ目に遭ったので、愉快になって笑いたくなるのである。換言すれば、両方の〈笑い〉が、自分だけがやられているのではなく、相手の富田や迷亭が同じようなことに遭ってしまうため、主人の大野やくしゃみ先生が笑いたくなるのであろう。

## ② 「寧国寺さん」と「寒月」

以上の「② 寧国寺さんの〈微笑〉」という項目で指摘したように、寧国寺さんが絶え間なく〈微笑〉を浮かべている。『吾輩は猫である』においても寧国寺さんとほとんど似ている人物がある。次の箇所を見よう。

「見ると、もう誰か来て先へぶら下がっている。たった一足違いでねえ君、残念な事をしたよ。考えると何でもその時は死神に取り着かれたんだね。・・」迷亭はすまし返っている。

主人はまたやられたと思いながら何も云わずに空也餅を頬張って口をもごもご云わしている。

寒月は火鉢の灰を丁寧な搔き馴らして、俯向いてにやにや笑っていた。」（二）

これは迷亭と寒月が松の下で「首懸の松」について話し合う場面であるが、波線部のように寒月が「にやにや笑ってい」る姿が見られる。また、次の箇所も挙げよう。

「飛び込んだ後は気が遠くなって、しばらくは夢中でした。やがて眼がさめて見ると寒くはあるが、どこも濡れた所も何もない、水を飲んだような感じもしない。たしかに飛び込んだはずだが実に不思議だ。こりゃ変だと気が付いてそこいらを見渡すと驚きましたね。水の中へ飛び込んだつもりでいたところが、つい間違っ  
て橋の真中へ飛び下りたので、その時は実に残念でした。前と後ろの間違だけであの声の出る所へ行く事が出来なかったのです」  
寒月はにやにや笑いながら例のごとく羽織の紐を荷厄介にしている。（二）

この箇所は二人が川の底から呼んでくる病気の〇〇子の話をしている場面であるが、波線部のように寒月が「にやにや」と笑っていることが注目される。さらに、次の部分も見てみよう。

「それから歌舞伎座へいっしょに行ったのかい」と迷亭が要領を得んと云う顔付をして聞く。

「行きたかったが四時を過ぎちゃ、這入れないと云う細君の意見なんだから仕方がない、やめにしたさ。もう十五分ばかり早く甘木先生が来てくれたら僕の義理も立つし、妻も満足したろうに、わずか十五分の差でね、実に残念な事をした。考え出すとあぶないところだったと今でも思うのさ」

語り了った主人はようやく自分の義務をすましたような風をする。これで兩人に対して顔が立つと云う気かも知れん。

寒月は例のごとく欠けた歯を出して笑いながら「それは残念でしたな」と云う。」（二）

この部分は妻と一緒に歌舞伎座へ行く約束の話であるが、ここでは語り手が寒月について「例のごとく」笑っていると述べるのが看過できない。また、三四人が垣根の外で主人の悪口を言う場面において「主人は大に逆鱗の体で突然起ってステッキを持って、往来へ飛び出す。迷亭は手を拍って『面白い、やれやれ』と云う」とあるが、ただ「寒月は羽織の紐を撚ってにやにやする」ことが見られる。続いて、迷亭が自分

の恋愛の話をする場面にも「ただ寒月君だけは『どうかその懐旧談を後学のために伺いたいもので』と相変らずにやにやする」とある。最後に、女学生に感心する迷亭の場面の「——ことにあの色の黒い女学生が一心不乱に体操をしているところを拝見すると、僕はいつでも Agnodice の逸話を思い出すのさ」と物知り顔にしゃべり立てる。『またむずかしい名前が出て来ましたね』と寒月君は依然としてにやにやする」という箇所を見過ごすことができない。以上のように、「例のごとく」、「相変らずにやにや」、「依然としてにやにや」と笑う寒月君は、

「② 寧国寺さんの〈微笑〉」で取り上げた「不断・相変らず・無間断」に微笑している寧国寺さんと似ていること言えるのではないか。

## 七、おわりに

本稿では、主に「独身」における語り手及び〈微笑〉・「笑い」に焦点を当て論じてみた。そこで、語り手が〈外〉に意識を著しく払っているのは、「独身」の静かな生活としての〈内〉の有り様を反映していることを指摘した。それで、〈外界〉を中心に描かれた第一節と大野の家の中で描かれる第二節～第六節までとの繋がりを見出し、第一節の構造上の重要性という本論の最初に提議した問題を明らかにすることができた。また、語り手について検討を進めることによって、自分の語りへの意識、教養的な口調、自分の印象や私見を述べることなどといった語り手の個性を明示した。そのような語り方によって、自分の存在を強調すると言えるのではないか。さらに、語り手としてのお祖母さんについて考察した結果、「独身」全体の名乗られていない語り手が一切言及しない大野の〈人物像〉や「女嫌」ということを明確することができた。

一方、本論の後半で取り上げた〈微笑〉・「笑い」の検討によって、様々な意味があると述べた。例えば、独身攻撃に対する対抗手段としての大野の〈微笑〉、俗世の雑事との関わりを断ち切っている寧国寺さんの〈微笑〉、英語ができない恥ずかしさを表すお祖母さん達の〈笑い〉などがあると指摘した。また、鷗外のお作品との比較によって「独身」の大野の「覚えぬ微笑む」ような〈微笑〉が「鶏」の石田にも見られ、鷗外自身だと思われる両者ともが鷗外の精神的な余裕を明示し

ているのではないか。最後に、漱石『吾輩は猫である』との比較において、迷亭が「独身」の大野的な〈笑い〉で主人の攻撃に対抗していると述べた。他に、主人の大野やくしゃみ先生の〈笑い〉が、相手の富田や迷亭を不愉快にさせる点で類似していると指摘した。

以上の考察から、「独身」は一見第一節が残りの五つの節とそれほど密接な関係がないように見えるが、上述したようにお互いに関連していることが言える。また、語り手や〈微笑〉・「笑い」の検討によって、様々な切り口が開けるのである。

### 【注】

(1) 古郡康人「森鷗外『独身』論」(『藝文研究』65号、1994年)

(2) 言わば主人公＝作者という観念が定着されてきたというのが今日までの研究状況である。

(3) 小堀桂一郎『鷗外選集』第2巻「解説」(岩波書店、1978年)において、「独身」には「世俗巷間の万事に恬淡たる鷗外の自画像の一側面」があると指摘する。

(4) 中村三代司「森鷗外『独身』論 ― 身体言語としての〈笑い〉」(『藝文研究』65号、1994年)

### 【参考文献】

(1) 景山直治『鷗外文学入門』(古川書房、1980年3月)

(2) 夏目漱石『現代日本文学アルバム / 足立巻一[ほか]編, 2』(学習研究社、2004年3月)

(3) 森鷗外『現代日本文学アルバム / 足立巻一[ほか]編, 1』(学習研究社、2004年3月)

(4) 森鷗外『鷄 独身 ; 二人の友 ; 小倉日記』(北九州市立文学館、2013年)

(5) 森鷗外『森鷗外全集 13 独逸日記・小倉日記』(筑摩書房〈ちくま文庫〉、1996年7月)

【付記】

本文の引用は、下記の全集を使用した。

- (1) 『森鷗外全集第一巻』（筑摩書房、1968年1月）
- (2) 『夏目漱石全集一』（筑摩書房、1987年9月）

**ACKNOWLEDGMENT.** The Researcher Would Like To Thank The Research Center Of The College Of Languages And Translation And The Deanship Of Scientific Research At King Saud University For The Financial Support Offered TO This Research.